

李密のこと

土田龍太郎

有晉一代の内、孝悌の德行もて名を立てし人士少からず。晉書列傳第一百八を孝友傳といへり。ここに名を列ねられし十四人いづれかしきはいふもさらなれど、ことにわれに慕はしくおぼゆるは、卷頭に名の出づる李密にてぞある。

李密字伶伯もと犍爲武陽の人なり。父早くみまかりて母やがて他家に嫁ぎしかば、祖母劉氏に撫育せられたり。密この祖母に仕ふることすこぶるまめやかにて缺くるところなし。その病み臥せしときはかつて帶を解かず湯藥のたぐひ必ずおのれまづ嘗みて後に薦めたりといへり。dう

李密少くして蜀に仕へたりしが蜀滅びて後、晉の泰初の初、世祖司馬炎詔命もて密を太子洗馬に徴さむとせしかども、をりしもかの祖母劉氏、齡九十六にてなほ世に長らへてありしかば、この祖母の奉養をはいのごとくに終へなばこそいかにてもあらめ、それまでは仕宦すまじてふかたき心おきてを叙べてつひに詔命に従はずしてやみたり。このときの上表、晉書本傳にさながら引かれたれど、今に世の人の賞鑒してやまざるは、かの梁の昭明太子これを李伶伯陳情表一首なる題號もておのが文選に採りしゆゑにてもあるべし。

祖母奉養のさなか暇だにあらば習學に勵みて倦まず。蜀一代の碩儒たりし譙周に師事せしことあれどそのさまいかにもねもころなりしかば、譙周の門人ども李密を孔子に侍る遊子夏のともがらに擬^{なぞ}へたり。

李密祖母失せて後洛陽に至りしかど、こたびはじめて太子洗馬の官に就きたり。

晉の常璩その華陽國志卷十一にて、陳情表をも引きつつ李密の事績を叙べて詳かなること

晉書本傳とさしもかはらねども、ここにて常璩、李密の字^{あざな}をなほ伶伯と號^よびつつ名を李宓

と誤り記せるは、李密と秦宓^{とひと}と異人なるをえ辨へざりしゆゑなること明らけし。

秦宓の言行、蜀書秦宓傳よりつぶさに知るべけれど、秦宓と李密ともに資性穎悟神機警拔にて、いづれもかつて蜀主に仕へしころしばしば吳に使し辯説をふるひてかしこの名士を歎服せしめて時の譽れをとりたりしかば、この二人かたみに似かよひてまぎらはしきところ少からざりしなり。されば常璩の李密の諱^{いみな}を誤り記せるはむべ怪しむにたらず。

李密の時にとりての辯説の迅く巧みなりしことせめてかたそばだに知らむとせば、かの一代の名士張茂先との問對のさまをけみせむにはしかじかし。この應答、晉書本傳には左のご

とくに載りたり。

司空張華問之曰安樂何如、密曰可次齊桓、華問其故、對曰齊桓得管仲而霸、用豎刁而蟲流、安樂公得諸葛亮而抗魏、任黃皓而喪國、是知成敗一也

ここにて、張華の魏に降りて安樂縣公に封ぜられし蜀の後主劉禪の賢愚いかなりしやを問ひしに答へて、李密たちどころに諸葛亮を管仲に比べ、後主を惑はせし闇者黃皓を桓公の佞臣たりし豎刁に並べつつ、おのが故主なる劉禪をかの春秋五霸の魁さきがけとなれる齊桓公小白に擬なぞへおほせしなり。

公子小白齊公となりて後、つひに諸侯を九合し天下を一匡するをえしは、かつておのれに矢を射かけてはばからざりし管夷吾を責め糾すことなくこれに政まつりごとをさながら委ねてよろづその計りごとに従ひしがゆゑなること、太史公の筆になれる齊太公世家にいともしるくして知らぬ人まれなるべければここにまねばずとも苦しかるまじ。この管仲まさに命絶えなむとするにのぞみて易牙關方豎刁みたりの三人を用ふまじきことを桓公にねもころに論したれ

ども、桓公つひにこの誠めにえ従はず、この三子政まつりごとを縦ほしいままにして國大いに亂れしはてに、桓公みまかるに及びてその柩ひつをかへりみるもの一人だになかりけるままに屍にわける蛆蟲のたぐひ群をなして戸の外まで出でたるはげにあさましといふもおろかなりしかど、李密右にこのことをさして蟲流ると云ひたるなり。

かかる李密の論あげつらひいともなだらかにてただ一わたり見るほどはことわりありげにうべうべしく聞ゆめれども、蜀の後主まこと齊桓に次ぐ賢君なりしとはいかさま思ひがたくぞある。

魏に降り洛陽に移りていまだほどなき劉禪のために文主司馬昭一夜宴樂を設けしことありけれどこのときの劉禪の言行いともをかしくかたはらいばかりしかばありあひたる人々の憫笑を招きしこと、蜀書裴松之注に載れる漢晉春秋の一節につまびらかなり。この佚事羅貫中の演義本によりても弘く知られたれば、ここにさらに説き及ばずともよろしからまし。

かかる佚事に拘はれて、この劉禪暗君なりきとひとかたに思ひ定めむはなかなか危ふかるべし。蜀の後主とりどころさらになかりしにてもあらざるめれども、志操堅からず人言に迷ひやすかりしかば、つひに中材の君のままにて世を終へたりしにたり。されば華陽國志

の内にて蜀郡太守土崇、後主を論ひて庸常の君と號よび、陳壽の論贊に

後主任賢相則爲循理之君、惑闇堅則昏闇之后

と記せるはおほむね適評なりともやいひつべからむ。

蜀の後主の賢愚の定めはいかにてもあれ、かの齊桓に次ぐ賢主なりと云はむはえしもうべなひがたし。されば李密の論對まことはしひごとにすぎねどもしひごとめきても聞えず一とほりことわりそなはれるやにおぼゆるは李密の造次辯論の卓拔なりしがためにほかならず。

王佐の才を世に謳はれし張華に對ひてひるまず、人のややもせば昏主の列に數ふまじきにもあらぬ亡國の君なるおのが舊主劉禪をさりげなく回護せしわざいともたくみにてめたし。忠臣は必ず孝子の門に出づといはむはことふりにたるべけれど、李密の人となりいばかりかしこくやさしかりけむ、げに慕はしきことこよなきなり。

（令和七年五月二十二日受附）